

③⑩（八以外。但し、文字は異なる）・③⑧（全て）・③⑨（所・王。但し、王は仮名）・④①（全て。但し、八は仮名違いが異なる）
・④⑤（八以外）・④⑥（全て。但し、王は一部仮名）・④⑦（全て。但し、王・宝二は仮名）・④⑧（宝二・常。外に、王・細が仮名で「こと」）

(イ) 正徹本系諸本と一致するもの

①（正以外）、①⑤（文字は異なる）、②⑤（全て。猶お、正は仮名）、②⑥（宝以外）、②⑨（正以外。但し、仮名）、③⑧（延）、④①（正以外。但し、宝は仮名違いが異なる）、④⑤（全て）、④⑥（正以外）、④⑦（全て。但し、延以外は仮名）

(ニ) 現存伝本に一致をみないもの

②④、③④（校合か）

③④と①であげた③⑧は正徹書写本に記された校合に類似し、それと関係があるかとも考えられるが、詳にしない。

前項の王堂所持本に関して③⑨④⑦の問題が生じている。つまり、陽明文庫所蔵本の朱筆書き入れは、支子文庫所蔵本、王堂所持本、未見の一本という三方向で、全て尽くされるのであるが、未見の一本を該当の数箇所につづった場合、王堂所持本は現存伝本より漢字書きが多いものとしなければならない。

以上より、陽明文庫所蔵本の書き入れについて、次の結果が得られた。

甲 正徹書写本の校合書き入れに類似する注記が見られるが、正徹書写本を写したとは思われない。

乙 墨の校合本文は延徳本に一致する。

(丙) 朱の書き入れは、支子文庫所蔵本、現存本より漢字の多い王堂所持本の祖本でほぼ尽くされるが、未見の一本を想定しなければならない所も数箇所ある。

この調査でも、校合本文であることが明示されているものと、いないものに質的な違いがあるのか明らかにならなかった。というよりも、支子文庫所蔵本がいずれにも関係しているかと思われることなどで、むしろ全て同一の本による校合ではないかとも思われせられた。高乗氏の扱いも、筆者のこの感想と同一方向であったわけだが、高乗氏のあげられた王堂所持本（あるいはその親本）以上に、対校に使われた伝本として支子文庫所蔵本を指摘できること、そして、三方向というかたちで、支子文庫所蔵本・王堂所持本の親本・未見の一本を想定できることが本調査の成果と言えるのではないかと考えている。

(註) 本調査の校合は、『徒然草の研究』と『徒然草研究序説』（桑原博史氏著）に依った。底本は『陽明叢書』影印本に依った。

⑬(但し、支。王・桂・浄・常に極めて類似する表現がある)

③③ (但し、書き入れそのものが正・延に近い)

(2) 見せ消ちの形をとるもの

(イ)支子文庫所蔵本と一致するもの

⑤① (仮名)、⑤③ ⑤④ ⑬ ⑭ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㋀ ㋁ ㋂ ㋃ ㋄ ㋅ ㋆ ㋇ ㋈ ㋉ ㋊ ㋋ ㋌ ㋍ ㋎ ㋏ ㋐ ㋑ ㋒ ㋓ ㋔ ㋕ ㋖ ㋗ ㋘ ㋙ ㋚ ㋛ ㋜ ㋝ ㋞ ㋟ ㋠ ㋡ ㋢ ㋣ ㋤ ㋥ ㋦ ㋧ ㋨ ㋩ ㋪ ㋫ ㋬ ㋭ ㋮ ㋯ ㋰ ㋱ ㋲ ㋳ ㋴ ㋵ ㋶ ㋷ ㋸ ㋹ ㋺ ㋻ ㋼ ㋽ ㋾ ㋿ ㌀ ㌁ ㌂ ㌃ ㌄ ㌅ ㌆ ㌇ ㌈ ㌉ ㌊ ㌋ ㌌ ㌍ ㌎ ㌏ ㌐ ㌑ ㌒ ㌓ ㌔ ㌕ ㌖ ㌗ ㌘ ㌙ ㌚ ㌛ ㌜ ㌝ ㌞ ㌟ ㌠ ㌡ ㌢ ㌣ ㌤ ㌥ ㌦ ㌧ ㌨ ㌩ ㌪ ㌫ ㌬ ㌭ ㌮ ㌯ ㌰ ㌱ ㌲ ㌳ ㌴ ㌵ ㌶ ㌷ ㌸ ㌹ ㌺ ㌻ ㌼ ㌽ ㌾ ㌿ ㍀ ㍁ ㍂ ㍃ ㍄ ㍅ ㍆ ㍇ ㍈ ㍉ ㍊ ㍋ ㍌ ㍍ ㍎ ㍏ ㍐ ㍑ ㍒ ㍓ ㍔ ㍕ ㍖ ㍗ ㍘ ㍙ ㍚ ㍛ ㍜ ㍝ ㍞ ㍟ ㍠ ㍡ ㍢ ㍣ ㍤ ㍥ ㍦ ㍧ ㍨ ㍩ ㍪ ㍫ ㍬ ㍭ ㍮ ㍯ ㍰ ㍱ ㍲ ㍳ ㍴ ㍵ ㍶ ㍷ ㍸ ㍹ ㍺ ㍻ ㍼ ㍽ ㍾ ㍿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘

(口) 桂宮本系諸本と一致するもの

①（浄以外）、②（王）、③（細・常以外）、④（全て）、⑦（細）、⑧（王）、⑨（宝二以外。但し、「出つれ」）、⑩（全て）、⑪（王・桂・宝二。猶お、所、細は文字を異にする）⑫（八・浄以外）、⑬（全て）、⑭（宝二・細・常）、⑮（全て）⑯（全て）⑰（八以外）、⑱（王・桂・宝二・細）、⑳（王・宝二が仮名の外。全て）、㉑（全て。但し、王・宝二・八・浄は仮名）、㉒（桂。猶お、所「弾」、王「たんし」）、㉓（所・宝二・細・浄）、㉔（八・浄・常以外。猶お、細「徳」、王・宝二は仮名）、㉕（全て）、㉖（仮名の浄以外、全て）、

④⑧(所)、④⑨(常以外)、⑤①(全て)、⑤②(桂・細・浄)、⑤③(宝二以外。猶お、王「つるき」)、⑤④(細。宝二「こまう。猶お、王・浄以外は「虚妄」)

(ハ) 正徹本系諸本と一致するもの

①（全て）、④（全て）、⑨（延「出つれ」）、⑩（全て）、
⑬（宝）、⑮（全て）、⑲（全て）、⑳（全て）、㉑（正以外。
宝は仮名）、㉒（宝以外）、㉓（全て）、㉔（全て）、㉕（延
宝（全て）、㉖（全て。但し、正は仮名）、㉗（正・延）、㉘
（正。外は「虚妄」）

(二)現存伝本に一致をみないもの

②① (猶お、「二舞」は、支・王・桂が一致する)

校合が明示されているものの項と同じ傾向が指摘される。即ち、
(イ)支子文庫所蔵本だけと一致するもの⑤、(ロ)現存伝本に一致をみないもの②が見られるのである。

その他、③⑧⑪⑫は王堂所持本との一致が指摘される。王堂所持本は既に高乗氏の推考されるところであり、対校本の一として挙げて良いだろう。

更に、墨で書かれたものには延徳本との一致が見られる。④⑤

(3) 補入の形をとるもの

(イ) 支子文庫所蔵本と一致するもの

①・⑮ (文字は異なる) ・ ②⑤ (仮名) ・ ②⑥・②⑨ (仮名) ・ ③⑩
(文字は異なる) ・ ③⑧・④①・④③ (仮名)

(口) 桂宮本系諸本と一致するもの

①（全て）・⑥（所・王）・⑮（文字は異なる）・⑳（全て）。
猶お、王は仮名）・㉔（八・常以外）・㉙（仮名で全て）。

堂所持本・宝玲文庫旧蔵第二本は仮名で「うち」とある。

④政事。なくして

支子文庫所蔵本は落丁で不明。王堂所持本・宝玲文庫旧蔵第二本・伝幽斎筆本・伝常縁書写本・正徹本系に「政事」とある。その中で漢字なのは宝玲文庫旧蔵第二本・伝常縁書写本・延徳本の三本である。

一二二段④おもむくへしとを(スミ)

高乗勲氏蔵第二本・田中忠三郎氏蔵写本・貞徳本系・王堂所持本・支子文庫所蔵本・桂宮本・宝玲文庫旧蔵第二条・伝幽斎筆本・八坂神社所蔵本・浄教房所持奥書本・伝常縁書写本・正徹書写本・宝玲文庫旧蔵本を除いて、諸本「を」である。

一二三段④きしめきたる

伝常縁書写本を除いて、諸本「ら」である。

一一五段⑤ころされけるとりイ

諸本「り」である。

⑤其人にそれ

諸本「其人に」である。猶お、支子文庫所蔵本・正徹書写本は「その」と仮名である。

⑤なつまさる所方(スミ)

桂宮本・伝幽斎筆本・浄教房所持奥書本・正徹書写本・延徳本が「方」である。それ以外の諸本は仮名で「

た」とある。

一二五段⑤けんにて剣

宝玲文庫旧蔵第二本・正徹本系の「けん」・王堂所持本の「つるき」以外は、諸本「剣」である。

一二九段⑤虚亡虚亡虚亡

支子文庫所蔵本・伝幽斎筆本・正徹書写本が「虚亡」である。猶お、王堂所持本・浄教房所持奥書本以外は「虚妄」「きよまう」「こまう」である。

以上の箇所を、校合と明示されているもの、見せ消ちの形をとるもの、補入の形をとるものに分けて、調べてみたい。

(1)校合が明示されているもの

(イ)支子文庫所蔵本と一致するもの

①⑥②⑦③②④④⑤

(ロ)桂宮本系諸本と一致するもの(伝本名は略号で示す。)

②⑦(細以外。猶お、王、宝二、八、浄は文字を異にする。)

②⑦(細。宝二、浄は一部仮名)

③②(宝二)

④④(細)

⑤⑤(全て)

(ハ)正徹本系諸本と一致するもの

②⑦(宝)

②⑧(全て)

⑤⑤(全て)

宝玲文庫旧蔵第二本・伝幽斎筆本・八坂神社所蔵本・浄教房所持奥書本・伝常縁書写本・正徹本系は「ひき」である。その他の諸本の中でも「弾し」となっているのは、嵯峨本、高乗勲氏蔵第二本・伝中和門院書写本・御所本・王堂所持本以外である。

③⑥ 柱を

「コトヂ」と読ませる注記か。杉田良寛刊本に「柱を」とある。なお、「ちう」と読むものに、整版十一行本・宝玲文庫旧蔵第二本・伝幽斎筆本・浄教房所持奥書本・伝常縁書写本、「はしら」と読むものに王堂所持本がある。

八〇段③⑦ そのゆへハのりて 運に乗して

王堂所持本・桂宮本・八坂神社所蔵本・伝常縁書写本・正徹本系以外は「運に乗して」である。なお、伝中和門院書写本は「うむに」と仮名である。

八三段③⑧ 月みちてかけ

正徹書写本・宝玲文庫旧蔵本以外は「ハ」がある。

八八段③⑨ あるもの。道風 小野

桂宮本・宝玲文庫旧蔵第二本・伝幽斎筆本・支子文庫所蔵本・八坂神社所蔵本・浄教房所持奥書本・伝常縁書写本・正徹本系を除いて、諸本「小野」がある。なお、王堂所持本は「をのゝ」と仮名である。

九二段④⑩ 後の矢なく 得

八坂神社所蔵本・浄教房所持奥書本・伝常縁書写本・宝玲文庫旧蔵本以外は「得失」である。なお、伝幽斎筆本は「徳」、王堂所持本・宝玲文庫旧蔵第二本は仮名である。

④⑪ わツカニ 二の矢

正徹書写本を除いて、諸本「わツカニ」がある。なお、八坂神社所蔵本・宝玲文庫旧蔵本は「はす」である。

一〇二段④⑫ 公云事によく

諸本「公」である。

④⑬ 者物にて。そ有ける

浄教房所持奥書本・伝常縁書写本以外は「者」である。又、八坂神社所蔵本・正徹本系以外は「そ有ける」がある。猶お、支子文庫所蔵本は仮名である。

一〇七段④⑭ 浄土寺の。前イ

鳥丸光広奥書古活字本・支子文庫所蔵本・伝幽斎筆本に「前」がある。

一〇八段④⑮ 其時節。にコトナラン一日ノウチニ飲食便利睡眠言語

支子文庫所蔵本は「言語」から落丁。その他の諸本は全てある。猶お、王堂所持本は「飲食」以下仮名で記される。

④⑯ 惜むとならん。ハ内に

支子文庫所蔵本は落丁で不明。

正徹書写本を除いて、諸本「内に」を持つ。猶お、王

宝玲文庫旧蔵第二本・王堂所持本・支子文庫所蔵本・桂宮本・伝幽斎筆本が「いそかて」とある。

②④ こたへていはしとて耳をふ。きて
諸本「いはしとて耳をふさきて」を欠く。
出

五〇段②⑤。まとふ

仮名の王堂所持本・支子文庫蔵本・正徹書写本を除いて、諸本・漢字の「出」である。

五三段②⑥ 耳鼻かけながら

八坂神社所蔵本・伝常縁書写本・宝玲文庫旧蔵本を除いて、諸本「うけ」を持つ。

五八段②⑦ いさましからん

今更あらんイ
支子文庫所蔵本・伝幽斎筆本に一致する。なお、宝玲文庫旧蔵第二本・浄教房所持奥書本は「今」が仮名である。

②⑧ 像に

伝中和門院書写本・伝元政上人書写本・木活字十一行本・宝玲文庫旧蔵第二本・王堂所持本が仮名の外、諸「縁」である。

②⑨ なさん。所は

正徹書写本以外は「求る」がある。その中で、偏易書写本・田中忠三郎氏蔵本が漢字を交えた「求る」である。

六〇段③⑩。みな人ノマへ

八坂神社所蔵本・正徹本系を除いて、諸本「みな人ノマへ」を持つ。但し、「マへ」は漢字。

六三段③⑪ 本一年の相ハ
とせのさう候

木活字十一行本・正徹書写本以外は「一年の相ハ」である。但し、王堂所持本・宝玲文庫旧蔵第二本・八坂神社所蔵本・伝常縁書写本・宝玲文庫旧蔵本は仮名になっている。

六六段③⑫ 柴の枝梅の枝つほみたと散たるとにつく五葉などにも
付
——「枝なかは」ニ引ク

宝玲文庫旧蔵第二本・支子文庫所蔵本のみ「梅の枝つほみたと散たるとにつく五葉などにも付枝」までを脱す。なお、線が正しい位置にひかれてもいるので、脱落でないかもしれない。
或本ニ六尺

③⑬ 七尺

正徹書写本・延徳本の「七尺」に注記が類似する。

「六尺」とだけ記す伝本はない。なお、支子文庫所蔵本は右に寄せてやや小さく「七尺」と書く。

大ミキリ

③⑭。石を

大みきりイ
正徹書写本の「石を」と注記を同じくする。八坂神社所蔵本・浄教房所持奥書本・伝常縁書写本・正徹本系以外が類似するが、いずれも「の」がある。

七〇段③⑮ 弾し
ひき給けるに

⑩ 野曲

諸本「野」である。

一六段⑪ ひさ王宮

万治二年本同類本・王堂所持本・桂宮本・宝玲文庫旧蔵
第二本に「ひはわこん」とある。猶お、伝幽斎筆本は

「ひわはこん」、漢字を交える伝本になると少くない。

二七段 ⑫ かしこところ

八坂神社所蔵本・伝常縁書写本・正徹本系以外は「内侍」である。

⑬ かばらぬ

正徹書写本・延徳本以外の諸本が「はらハぬ」である。

二八段 ⑭ 御す
ぬを
のか
のけ
もて
かう
あら

宝玲文庫旧藏第二本・支子文庫所藏本・伝幽斎筆本・伝常縁書写本が「をかけて」とあって、御調度」に直接する。

三三⑮見せられけるに。イックモ難ナシトテ既ニ遷幸ノ日近クナリ

ケルニ

諸本あるが、文字まで完全に一致するものはない。

三八段①⑥すぐれてゐろかなる

支子文庫所蔵をのみ「すくれて」を欠く。

⑪ 身まつつかかららいいややししきき位位ににややみみぬぬるるもも又又多多ししイイ本本

校合本文に全く一致するものはないが、「モ」のない「ま
つしういやくしてやみぬる又おほし」は王堂所持本・桂

宮本・支子文庫所蔵本・浄教房所持奥書本・伝常縁書本にある。猶お、八坂神社所蔵本にも類似的の表現が見られる。

⑮ 休ヤミぬる

諸本「ヤミ」である。

⑬ 誰に

伝常縁書写本が「誰をか」とある外、諸本「に」である。但し、「か」を欠くのは八坂神社所蔵本と正徹本系に限られる。

マコトノ人ハ智モナク功モナク
名を思ふは人の聞をよるこぶ也
是如ニコレヨリ次ヲロカ也マテナシ

伝幽齋筆本・正徹書写本・延徳本以外は「まことの人は」に直接する。その中で、田中忠三郎氏蔵本・明暦四年刊本・小堀遠州書写本・王堂所持本・宝玲文庫旧蔵第二本・八坂神社所蔵本・浄教房所持奥書本以外が漢字・仮名の使い分けに一致をみる。

四二段②見えすにのまいの

「（ものも）見えす」を欠く伝本はない。猶お「二舞」と漢字だけなのは、王堂所持本・支子文庫所蔵本・桂宮本である。

②② おそろしにおそろしく

八坂神社所蔵本・正徹本系を除いて、諸本「おそろしに」を持たない。

四九段②③ゆるくしゆるくすへき事をいそきて

「ゝ」は「ら」とも読まれそうな文字で注記の必要を感じた。ここは宝玲文庫旧蔵第二本（桂宮本系）、陽明文庫所蔵本（正徹本系）が「ら」とある外、諸本「タ」である。もっとも、書写の出来具合で「ゝ」、「ら」の揺れはあり得よう。

「ゝら」も読み取りにくい書きようである。もっとも「くら」と読むことはないと思うのだが、ここは延徳本（正徹本系）が「くら」とある外、諸本「カラ」である。

これも、五二・ウだけでいかにも異様である。やはり、気まかせの作業であつたと解すべきものであろうか。

三

合点、本文系統についての詳細は別稿に譲りたい。猶お、本文系統は本稿中にも伺われるように、筆者は桂宮本同類本と見ている。

（注①）『語文研究』第四十三号（昭和五十二年六月）四十六頁（注②）章段の数え方、本文系統などは、『徒然草の研究』に依った。

陽明文庫所蔵本所載校合本文との関係について

陽明文庫所蔵本の校合の一部は冒頭の高乗氏論で紹介されているのであるが、次に支子文庫所蔵本の記事のある所までから、主要なものをあげて、調査してみたい。

一段①御ありさま。さうなり

正徹書写本以外の諸本に「は」がある。又、浄教房所持奥書本・延徳本以外は「さらなり」である。

②なるも

支子文庫所蔵本・王堂所持本が「と」である。

③僧賀聖の

支子文庫所蔵本・伝幽斎筆本・伝常縁書写本・正徹書写本以外の諸本に「増」とある。

④にくけさなる

諸本「にくさけなる」である

⑤かけすけおまるゝこそ

支子文庫所蔵本のみ「かけす」を欠き「けをさるゝこそ」とある。

⑥あり。たき

嵯峨本同類本・屋代弘賢刊本・御所本・王堂所持本に「か」がある。

一〇段⑦すひかきたより

伝中和門院書写本・桂宮本・宝玲文庫旧蔵第二本・八坂神社所蔵本・浄教房所持奥書本・伝常縁書写本・正徹書写本・宝玲文庫旧蔵本以外は「いの」である。

⑧からすの

王堂所持本に「とり」とある。猶お、支子文庫所蔵本は

「鳥」である。

一四段⑨云すてつれはおそろしき

木活字を除く貞徳本系・支子文庫所蔵本に「いつれはおもしろく」とある。猶お「出（つ）れ」となっている本は多い。

・高乗勲氏蔵第一本（貞徳本系）、王堂所持本・宝玲文庫旧蔵第二本（桂宮本系）・正徹書写本・延徳本（正徹本系）に「の」がある。但し、なくても補って読むはずの「の」である。

六〇段

人のとひ^{けれハ}さる物を（五四・ウ）
諸本「けれハ」があり、又、これを欠くと続き具合が落ち着かない。

（四）印なく、該当の箇所の右行間に小字で補筆するもの。

一三段

あはれなる事^物おほかり（一二・ウ）
校異みたいだが、他に例がないので、ここに入れた。「物」となっている伝本は他にない。「かけるもの」の「もの」に対応させたのかもしれない。

三〇段

さるもの、日々にうとし（二八・オ）
諸本「ハ」がある。

八六段

惟^の継中納言ハ（七四・オ）
八坂神社所蔵本・浄教房所持奥書本・伝常縁書写本・伝幽斎筆本（桂宮本系）・正徹書写本・陽明文庫所蔵本・宝玲文庫旧蔵本（正徹本系）に「の」がある他、諸本これを記さない。

八七段

日^にくれたる山中に（七五・オ）
八坂神社所蔵本・浄教房所持奥書本（桂宮本系）・延徳本・宝玲文庫旧蔵本（正徹本系）が「に」を欠く外、諸本「に」を持つ。

九三段

といふへしと云人^に（八二・オ）
浄教房所持奥書本（桂宮本系）が「に」を欠く外、

諸本これを持つ。

九五段

両説なれい^{つれも}（八二・ウ）
諸本「ハ」がある。文法上からも「ハ」のあるべきところと思う。

一〇一段

内辨をつめ^とられけるに（八五・ウ）
諸本「と」がある。「つとむ」で「と」は欠かせないところである。

一一四段

一人ハひさ^さち（九七・ウ）
伝幽斎筆本（桂宮本系）に一致する。

一二二段

よくあ^ちひを（一〇三・オ）
諸本「ち」がある。「食」の「あちひ」なので「ち」は欠かせない。

一三〇段

萬のあそび^もも勝負を（一〇九・ウ）
あそびの興^ななるへし（一〇九・ウ）
ともに諸本それぞれを持つ。

以上、補筆一五例、他三例であるが、これも例えば七五・オに「ミな太ぬき矢」の明らかな「刀」の脱字があるにもかかわらず補われていないことのように、その意図又は誠実さを疑いたくなるものである（因に、。印のない方が補筆は不足しているようである。ただし、該当の頁に限って比較した場合）。桂宮本同類本とは、一、一二、一三（「物」）、二五、八六段の五例が異なる。

最後に、カタカナの小字で本文の右に文字を注記したところがあった。既に一一四段に平仮名のそれがあることを記したが、これとの関係は詳にし得なかった。

五九段 おもひた^タらん人ハさりかたく心にか^{カラ}らんことの（五二・ウ）

諸本「か」があり、係り結びの関係から「か」があった方が良いと思うのに消しているのが注目される。正徹書写本のような「争」の訓読みが関係するのかもしれないが、詳にし得ない。

一二二段 やしなハすともとこそ（一〇二・オ）

諸本「とも」を欠く。

一二三段 とゝのふしれる人（一〇三・オ）

ミセケチの中で、ここだけが訂正字を持つ。浄教房所持奥書本が「ひ」の外、諸本「へ」である。ここも或は送り仮名のない「調」の訓読みに関係するかも思われるが、詳にし得ない。

一二八段 御気色もたかひに昇進も（一〇六・ウ）

諸本「に」を欠く。

以上の六個所であり、例えば八二・オには「はな」の丁変わりによる衍字があるにもかかわらず「ヒ」がないことにも明らかのように、極めて気紛れな校正と思われる。校正に用いた本が支子文庫所蔵本の親本なのかも別筆とすれば疑われるが、詳にし得ない。桂宮本同類本とは、五二・八七・九四段の三個所が異なることになるが、うち二個所が係り結びにかかわりながら特殊であることが注目される。

三に、補筆した箇所があった。これには、次の(イ)(ロ)二種類があり、同筆（ただし、本文とは異筆か）かと感じられたが、その違いは詳にし得なかった。

(イ) 該当の箇所に○印をして、右行間に小字で補筆するもの。

一一一段 折ちらしたる。さすかに（一一・オ）

一二段

王堂所持本・八坂神社所蔵本・伝常縁書写本（桂宮本系）・正徹書写本・延徳本・陽明文庫所蔵本（正徹本系）が「ハ」を持つ外、諸本「ハ」を欠く。

むかひ。たらハ（一一・ウ）

桂宮本・宝玲文庫旧蔵第二本・伝幽斎筆本・八坂神社所蔵本・浄教房所持奥書本・伝常縁書写本（桂宮本系）・正徹書写本・延徳本・宝玲文庫旧蔵本（正徹本系）が「ゐ」を欠く外、諸本「ゐ」がある。

一三段

なくさむわざなれ（。印は「れ」の中）（一二・オ）

伝幽斎筆本が「ぞ」なり。・伝常縁書写本が「ぞ——なれ」とある外、係助詞「ぞ」を持つ諸本は全て「なる」である。猶お、「こそ——なれ」の表現をとるものに屋代弘賢刊本・万治二年本同類本（貞徳本系）、係り結びのないものに正徹書写本がある。

ここは、誤りを正した箇所と見られるが「ヒ」でないのは、補筆の途中で気付いたためと考えるべきなのであろうか。

二五段

法成寺など見る。こそ（二四・オ）

諸本「に」を欠く。

三十段

かたゞになく成ぬ。そ（二九・オ）

伝常縁書写本が「る」を補入していることを含めて諸本「る」がある。文法上からも「る」のあるべきところと考える。

五十段

応長のころ伊勢。国より（四三・オ）

伝中和門院書写本（嵯峨本系）、万治二年本同類本

所も出てきたので、次に、考察を交えながら、やゝ詳しく記しておきたい。

一

所収内容について「巻頭より一三四段の途中までで、以下は逸」と紹介されているが、落ちたり飛んだりしている部分が一個所ずつある。

まず、一〇七段の「女にわらへれぬやうにおふしたつへしとそ浄土寺前関」(九一・ウ)から一〇八段の「期忽にいたる」(九二・オ)への続きは明らかに不自然である。この所は、綴じ穴のあたりに虫食が著しいので、その関係(綴じ直し)で中心の一葉が脱落したかと思われる。

次に、これに引き続く九二・ウにかけての部分、一〇八段の「飲食便利睡眠」(九二・オ)から一〇九段の「あやうく見えしほとへ」への続きである。これは、不注意に頁を捲つたために飛んでしまったと考えられ、脱文の程も前記の約半分である。

これらの部分が極めて近接していることは、或は共通する因子があるのかと思わせもするのであるが、目下偶然に帰している次第である。

二

なしと紹介した書入、ミセケチ等が少々あった。

まず、イ本による校合が一個所ある。即ち、六五段の「冠を」(五七・ウ)の右行間に「桶イ」とあるのがそれである。校合はやゝ小さくした字で記されているが、本文の筆跡に近いと感じられ

る。本文は桂宮本同類本の宝玲文庫旧蔵第二本「かむり」、や、伝細川幽斎筆本「冠」に一致する(漢字・仮名の違いは問わない)。

一方、桶(漢字・仮名を問わず)をもつ本文は、前記二本や八坂神社所蔵本・浄教房所持奥書本(桂宮本系)と正徹本系四本の都合八本以外の諸本に見られるのである。しかし、一個所だけということのために、イ本についてはこれ以上詳にし得ない。又、一個所だけということには不審が付き纏うのであり、例えば五七・ウには「仰られけるに」という他本にない表現もある。もっとも、これは支子文庫所蔵本の特殊本文なので、イ本校合をそれ以前のものと見なせば一応説明が付くけれども、やはり一応にとどまっている。どうしてもこの一箇所だけ校合が記されたのか、校合者の態度、校合イ本の性質が絡まって、不審は晴れない。

次に、細字で左横に「ヒ」とミセケチした所があった。例中一個所の訂正字によれば別筆かと思うのであるが、断定は避けたい。

五二段 神へまいることはいなれ(四五・ウ)

高乗氏蔵第一本(貞徳本系)が「〇〇」を欠く外、諸本「こそ」とあり、係り結びの関係から「こそ」とあるべきところと思う。訂正を落としたかともとれるが、詳にし得ない。

八七段 かひかひしけなれハ(七四・ウ)

八坂神社所蔵本・伝常縁筆本(桂宮本系)、正徹書写本・延徳本・宝玲文庫旧蔵本(正徹本系)が「な」を欠く外、諸本「な」がある。

九四段 いかてか君につかうまつり候へき(八二・オ)

ることを示した一段の「も^{トイ}」の如きは校合本文であることが明らかにされているのである。しかしその他の場合はみせけちのミ印又は単線で消して校合本文を記しているため、親本よりの転写の本文が消滅して、校合本文が本文とされてしまう危険が存するわけである。特に朱筆でなく墨筆でこれが行われている個所に至っては親本より転写の際の誤写を訂正したと誤^{マヤ}まれるおそれがある。従ってもし陽明本を転写するものがあつた場合おそくみせけちして校合された本文を本文として書写し、正徹本系本文と校合された他本の本文との混合本文が出現することになるわけである。現存写本の中にはこうした陽明本を伝写したものは見出されない。ので、陽明本のこうした校合によって生ずる混合本文をもつたものは存在しないのであるが、今日数多くの他系統の本文との混合本文をもつたものが存在しているのは、このような事情によって生じたものが存在しているのではないかと考えられるのである。しかればこの陽明本の校合に用いられた写本は何であつたであらうか。三八段には前記の例に示したように「失本ナシ」とある。この「失本」なるものはどんな本であるか不明であり、「すくれて」の本文を欠いた写本は今日まだ管見に入らないものである。陽明文庫にも他に該当の写本は存在していない。しかし他の例を見ると、一段の「したりかほなるも^{トイ}」とある「と」とあるのは王堂本だけであり、一〇段の「から^{トリ}」とある「トリ」とある本文はこれも王堂本だけである。四九段の訂正本本文は桂宮本、宝玲第二本、王堂本、寿命院抄だけがもっているものであり、それ以外の例は嵯峨本系、貞徳本系、桂宮本系がともに同一の本文をもっているものである。これから推察すれば、陽明本の校合に用いた

たものは王堂本かあるいはその親本の類であつたものといえるのである。王堂本が慶長頃の写本かとみられることは王堂本の項で述べた通りで、その可能性は認められるのである。王堂本の書写が慶長末期としても、その親本は慶長初期には存在していたはずであり、それによる校合ということも考えられるところである。校合本文は校合でも明らかのように嵯峨本系の本文とも一致するものがあるので桂宮本系の一本と嵯峨本との両本以上で校合されているとも考えられるのであるが、嵯峨本の刊行は慶長年間であることは推定されるも、果して竜山公がこれによつたかを確定するものはない。ところが、王堂本は桂宮本系においては御所本とともに最も嵯峨本に近い本文をもっているものである。ので、王堂本あるいは王堂本の親本をもつて校合したとすれば、嵯峨本の本文と一致するものがかなり存在することは可能である。このようにみてくるとき竜山公の校合に用いたものは少くとも一本は王堂本（あるいはその親本）であつたと推定しても間違いなさそうである。

長々と引用してしまつたが、筆者は支子文庫所蔵本の調査をしているうち、これが「すくれて」を欠く写本であることを見出した。本論は、この支子文庫所蔵本の出現にあたつて高乗氏論を見出し、若干の補訂を試みるものである。

(注①) 同書、第一章、諸本の研究 五六八～五七〇頁

支子文庫所蔵本について

支子文庫所蔵本については、その書誌が既に『語文研究^(注①)』に掲載されている。しかし、その後の調査によつて、訂正、補足すべき個

支子文庫所蔵本『つれづれ草』について

——その書誌と陽明文庫所蔵本所載校合本文との関係——

橋口 晋作

はじめに

高乗勲氏は大著『徒然草の研究』^(注①)の中で、陽明文庫所蔵本について、次のことを指摘された。

なお陽明本について述べておきたいことは最初に述べたように、この写本には朱及び墨でもって上下巻に異本校合が施されていることである。この校合はこの写本が近衛家に入った後の校合であり、近衛前久（龜山公、既述の中和門院本の筆者に擬せられている中和門院の父）の手によってなされたものであることも既に述べたところである。さてこの校合であるが、上下巻を通じてかなりの個所に行われているが、決して逐条的に語句を追うた精密さでないため、当然誤写とみられるものでもそのまゝにされている個所が多いのである。おそらく龜山公が暇にまかせて気のついた箇所を校合したものであらうと考えられる。前篇の校合には参考のためこの校合本文をも付して示しておいたので、それによって校合の姿は知ることができるわけである。例えば、校合の姿は

（一段）一の人の御ありさまとイさらなり

（一段）時にあひしたりかほなるもとイ「と」とあるのは「王堂

本」のみ）

（二〇段）すひかきたイ（朱）よりおかしく（「正」は「すいかひ」^{（の）}）

たよりおかしく」「嗟」その他は「すいかいのたより……」

（二〇段）からすトリ（朱）のむれるて池の（「とり」とあるのは「王堂

本」だけ、他本は「鳥」又は「からす」）

（一四段）あやしのしつ山かつのしわさも云いづれはおもしろく（朱）すてつれはおそろ

しき（「正、宝」のみ「いひいてつれは」、他本は「いひい

つれはおもしろく」）

（一六段）ひさ王宮ひわこん（朱）一（「線」も朱、「正、延、陽」は「ひさ

王宮一」「宝、八」は「ひさわうみやいち」、他本はすべて

「琵琶和琴」又は「ひはわこん」）

（二四段）これも（スミ）又（イ）つまたかあらん

（二六段）かはらぬ庭（朱）に花そちりしく（「正、延」は「かはら

ぬ」、他本は「はらはぬ」）

（三八段）すくれてをろかなる人也（「失本」とあるも不明、（失本ナシ）（朱）

「すくれて」を欠く本未見）

（四二段）たゝおそろしにおそろしく（「陽」朱線で「おそろ

しに」を消す。「おそろしに」のあるは「正、延、陽、宝、

八」他本はなし）

（四九段）速にすへき事をゆるくしいそかて（朱）ゆるくすへき事をいそきて

すきにしことのくやしき（「陽」は朱線で消し、「いそかて」（朱）

と補記す。この訂正本文と一致するものは「桂、宝二、王、

寿」だけである。）

右は上巻の初めの部分から摘出したものであるが、異本本文であ